

夕張市調査団報告

地域の再生に挑む「夕張」のいま ～夕張市を訪問して～

自治労銚子市役所職員労働組合 **大網 裕弥**

私たち銚子市職労は、一昨年実施した自治研活動「東日本大震災体験アンケート」に引き続き第二弾として、6月26日～28日の3日間、全国の市で最高の高齢化率と急激に進む人口減少に苦しみ、今なお財政と地域再生の真っただちにある北海道夕張市を訪問し、調査、研究を行ってきました。

今回の訪問のきっかけは、宮崎伸光先生（千葉県地方自治研究センター理事長）が夕張市に滞在し、市史編さんの仕事をされるという情報を入手した時からスタートしました。

この夕張訪問ですが、実は過去に一度計画したものの頓挫した経過がありました。それは2009年に自治研全国集会在札幌で開催された際、それに参加すると同時に夕張へも考えたのですが、当初の日程が国政選挙により変更され、延期された時期が年度当初と重なり、やむなく断念したものでした。そんなことから、理事長にはたいへんご無理をお聞きいただきましたが、この機会を逃したら二度と実現することはないと決断するに至りました。

今回の活動参加者は計9名。うち3名は市職労及び連合地協の推薦議員（市議）です。また、組合員からの参加者は執行委員長以下6名で、なかには自治研活動自体、初めての経験という若手組合員も含まれていました。これは今回、組合費を使用しての活動ではなく、原則、自己負担としたため、組合全体での募集はせず、企画者数名の範囲で声かけをしたことからこのような参加メンバーとなりました。

■銚子市との比較で地域を考える

訪問先である夕張市については、夕張メロンが全国的に有名、映画「幸福の黄色いハンカチ」の舞台、そして財政再生団体に指定されたこと程度の知識しかなかったため、活動の実施にあたり、銚子市との比較を含め、事前調査を行いました。そのことによりわかったことは、市の面積が銚子市の84.19km²に対し、約9倍（763.20km²）もあり、逆に市の人口は9,801人と銚子市の7分の1、人口密度においては銚子市の836人に対し、わずか14人（全国の市で最低）であること。また、高齢化率は銚子市の32%を大きく超える48%であり、市民の半数近くが65歳以上であること。問題の財政面では、財政規模（26年度一般会計）は115億円（銚子市252億円）、財政力指数（以降25年度決算）は0.18（銚子市0.57）、経常収支比率120.9%（銚子市92.8%）、資金繰りの危険度である実質公債費比率（早期健全化基準25%）が47.2%（銚子市14.5%）、将来の財政を圧迫する可能性を表す将来負担比率は748.7%（銚子市190.7%）でした。また、収入面では地方税が銚子市の10分の1、約8.5億円であるのに対し、地方交付税は銚子市とほぼ同等の52.8億円となっています。財政調整基金（25



映画のまち夕張

年度)に関しては、国の指導もあることから、銚子市の1,617千円に対し、600倍以上の約10億円となっていることなど、これらを前提に現地での調査、研究活動を行いました。

■鈴木市長との面会

さて、現地での活動のスタートは、鈴木直道市長との面会でした。これは鈴木市長が宮崎理事長の大学時代の教え子という縁で設定していただきましたが、以前、千葉市で開催された自治研集会での講演時と同様に若さにあふれ、エネルギッシュな様子を感じられました。

次に訪問したのは、財政破たん後も開館している石炭博物館。ここでは青木夕張地域史研究資料調査室長(元石炭博物館館長)の案内により、炭鉱をはじめとした夕張の歴史や文化などを学びました。

その後は夕張市立診療所、夕張市社会福祉協議会を訪問し、各々1時間半ほど事前に提出した質問を中心に意見交換や施設内の見学をさせていただきました。

市立診療所では救急対応や医療スタッフの充足状況、地域での医療連携等の質問に対し、「夜間は看護師1名のみ体制であるが、最終的には救急を受け入れている。医療スタッフについては高齢化が進み、ギリギリの状況。市内は当然のこと、市外からの誘致についても努力している。また、定年制度は設けず、働ける人には働いてもらうようにしており、収支改善のためには来る者(患者)は拒まずという方針」であり、医療連携という観点では、「この間の信頼回復のため、岩見沢や札幌等の病院に出向き、情報交換等に努めている」との説明がありました。

社会福祉協議会では横川社協会長、本間民児協会会長及び野尻事務局長から質問に対する説明を受けた後、意見交換を行い、社協の特徴的な活動として、市立診療所及び消防救急隊と連携した「命のバトン」(かかりつけ医や主な病名、処方されている薬の内容等を記載した用紙をペットボトル状の容器に入れ、冷蔵庫に保管。救急隊は緊急時



にそれを初めに確認し対応するもの)や人工透析患者の送迎事業等について説明がありました。また、財政破たん後、市による福祉サービスが大幅に削減されたことなどから、福祉活動の大部分はボランティアによる活動が基本となっており、その結果、ボランティア意識も必然的に高まってきたとの報告もありました。

なお、視察初日の最後には夕張市職労との交流会を開催し、厚谷元市職労委員長(現市議会議長)をはじめ、4名の役員、書記の皆さんと情報交換を行い、「国の指導(方針)による平均20%(平成25年度)の給与カットや時間外勤務手当の頭打ちなど、人件費の大幅削減が行われている中で、本来、働く者に認められている最低限の権利である団体交渉さえもなかなか実施できない」と組合にとっても依然厳しい状況であることの説明がありました。

■夕張炭鉱跡地等を視察

視察2日目は旧石炭の歴史村や旧北炭夕張炭鉱跡地、そして、新旧の市営住宅を見学しました。旧石炭の歴史村周辺は、同時期に建設された各記念館や遊園地など多くの施設が、今も解体、撤去



ができずに廃墟同然のごとく放置されていました。その情景は松尾芭蕉が詠んだ「夏草や兵どもが夢の跡」のフレーズが頭をよぎるとともに、今は人の姿がまったく見られないこの場所も、以前は多くの人で賑わっていたのかと思うと何とも言えない気持ちになりました。

市営住宅の見学では、コンパクトシティ化を進める中で、市営住宅の集約は銚子市においても共通の課題であると感じました。夕張市の公営住宅の戸数は3,000を優に超えていますが、実際の入居率は70%程度で、残り30%は空室のまま放置されており、使用されなくなった他の公共施設と同様に荒廃化が顕著でした。また、市全体での公営住宅への入居割合は50%弱であり、まちの中心部を移す方針として、新しい市営住宅も建設してはいるものの、古くからの住宅に居住している入居者の高齢化や「元炭鉱住宅への愛着」などから、集約化は思うようには進んでいない状況でした。これを銚子市に置き換えても集約化は必須の課題ですが、その実現は容易ではなく、そのためには相当の時間を要すると思われる。実際に集約を進めるにあたっては、慎重の上に慎重を期すと同時に、入居者の人権等に配慮した丁寧な説明と対応が必要であるとも実感しました。

今回、夕張市を訪問した印象はとにかく「広い」、そしてたいへん申しわけない言い方ですが「人の雰囲気を感じられない」ということでした。夕張市は、まちの形が南北に40km近くあり、山と山に囲まれた狭い土地に国道が走り、その周辺に集落が形成されています。しかし、道路沿いに形成されているまちは、本来ならば連続しているはずで



空き部屋の目立つ市営住宅

すが、夕張が炭鉱を中心にできたまちであることから、結果的にまち（集落）が炭鉱ごとに点在してしまい、市の中心となる市街地が無いように感じられました。

■急激な人口減少のなか苦闘する姿を理解

いま、夕張市は急激な人口減少、高齢化率48%という悪条件の中にありながら、鈴木市長、厚谷市議会議長を中心に市民、職員が一丸となって、地域の再生に様々な立場、形で取り組んでいる様子が感じられました。また、そのことにより、市民の自助、共助の意識が醸成されているようにも思えました。しかし、財政再生団体の指定から5年が経過したものの、地域の再生というゴールは果てしなく遠く、今だ視界にも入ってきてはいません。

よく簡単に「第二の夕張」という言葉を喩（たとえ）として使う方がいますが、これは本当の夕張の実態を理解していない発言だとも感じました。今、私たち銚子市も厳しいことは間違いありませんが、夕張市と比較するにはレベルが違いすぎます。夕張市民は、最高の負担で最低のサービスという、次元のまったく違う状況の中で苦闘し、奮闘しています。その夕張市と現状の銚子市を同列に比較すること自体、とても失礼なことであり、銚子は銚子なりの努力をすべきとあらためて認識させられました。

今回のような現地での視察、研修は参加者にとっても、そして市職労にとっても初めての経験でした。今後、この貴重な経験を少しでも活かすことができれば、自治研活動の成果もあったと評価できるかもしれません。そして、いつかまた、機会があれば、夕張のその後を確かめに出かけてみたいとも思っています。

最後に2日間、同行いただいた青木夕張地域史研究資料調査室長、厚谷夕張市議会議長をはじめ、各施設で対応いただいた担当の皆さん、そして視察先との調整等、現地でのすべてについてお手数をおかけした宮崎自治研センター理事長に、誌面をお借りして、心より御礼を申し上げます。